

家族は生命を^{いのち}生み出し、生を^う育むところ上^{うえ}廣^{ひろ}哲^{てつ}治^じ

家族であれば当然わかり合っているし、強い絆^{きずな}で結ばれている——私たちは、無意識のうちに、このような思い込みに安住して、家族関係を維持するための努力を怠っているのではないのでしょうか。それが家族の不和をもたらし、家庭愛和を妨げている大きな原因になっているのです。

この春の大会で、私は、家族は「一人ひとりが家族であろうと努力するから家族なのだ」とお話ししました。愛和した仕合わせな家庭を築くには、家族一人ひとりが家族であるための努力を怠ってはならないのです。相手の気持ちを気遣い、会話をし、可能なかぎり同じ食卓で共に食事をする。家族であることに安住せず、家族になるように各々^{おのおの}が努力をしなければならぬということです。それを、私は、「家族は、ただ当たり前前に（あるもの）ではない。一人ひとりが（つくり上げるもの）である」という表現で訴えました。「ある家族」から、家庭愛和する「つくり上げる家族、なる家族」へシフトしていただきたいという願いからです。

今年、名誉会長が、平成二十年の春季講演会で「この区切りのよい年を『家庭愛和元年』といたしましょう」と呼びかけられてから十年がたちました。当時、公表された家庭・家族に関する統計データは決して明るいものではありませんでした。例えば、一人の女性が一生のうちに出産する子どもの数の平均を示す合計特殊出生率は、平成十七年には戦後最低の一・二六を示して話題になりました。これは平成元年に「一・五七ショック」といわれた数値よりもさらに下がっています。離婚率や生涯未婚率の上昇や、結婚年齢、出産年齢の高まりもありました。このような時代背景を踏まえて、名誉会長は「家庭愛和元年」を提唱されたのでした。

私は、この家庭愛和をさらに一歩進めていただくために、「つくり上げる家族」と訴えたのです。「つくり上げる家族」の力に気づいたのは、東日本大震災で祖父母、親、兄弟姉妹^{けいていしまた}などの家族を失った被災者の、家族を再建していく力強い歩みを知ったからです。深い悲しみや苦しみ、心の傷を乗り越えて、一人ひとりが強い意志で家族の幸福を築こうと努力をし始めたのです。その姿に、「家族をつくり上げる」力を知りました。身内を失った他人同士が、肩を寄せ合って家族になるケースもありました。ただ血がつながっているから家族なのではない、ただ両親と子どもが揃っているから家族なのではない、家族であろうと努力するからこそ、本当の家族になるのだと理解したのです。

家族には、このような強い力が潜んでいます。それは、家族が私たちの生命を生み出し、生を育むところだからではないのでしょうか。人間は家族から生まれ、家族によって育てられて成長します。生き物としてのヒトが、過酷な自然のなかでも生き延びられるように、われわれは「大自然の摂理」によって家族を形成するようにつくられているのです。家族に危機が及べば、その生命を守るために見返りを求めずに助けようとする。一般社会では、人はさまざまな能力と有用性で存在を認められる傾向にありま

すが、家族はただ家族の一員であるだけでその存在が認められ、かけがえのない存在として受け入れられます。そこには無償の愛があるのです。それが家族の力のもとになつていゝのではないのでしょうか。

ところが現在、家族そのものが減少しつつあるといわれています。それは少子化問題とも重なつています。原因として挙げられるのは、「晩婚化」「生涯未婚率（五十歳の時点で一度も結婚したことがない人の割合）の上昇」「グローバル化による所得格差」「恋愛・結婚観の変化」などで、そこにはさまざまな要因があり、家族を形成しにくくなつていゝのです。

例えば、「生涯未婚率」についていゝれば、昭和六十年は男性三・九パーセント、女性四・三でしたが、平成十二年は男性十二・六、女性五・八となり、平成二十二年は男性二十・一、女性十・六パーセントと増えていゝます。男性の五人に一人、女性の十人に一人が未婚ということでは、

家族社会学を研究する中央大学教授・山田昌弘まさひろさんは、日本の将来について、

「二〇三〇年に四十歳の日本人女性で、結婚して子どもをもつていゝ人は、六割強にすぎず、四割近くは子どもがいない（四人に一人は結婚していゝない）という予測がたてられる。……子どもをもつていゝ男性は四割以上となる計算である」（『少子社会日本—もうひとつの格差のゆくえ』）と述べていゝます。現況から見ると、恐らくこの予測の通りに進んでいゝのでいゝしょう。

ゴリラなど類人猿の研究から家族の起源を探つてきた京都大学総長・山極寿一やまきわじゅいちさんは、「家族の減少」を、より悲観的に「家族の危機」と捉えていゝます。

「多産の特徴のもとに発達した人間の家族が、少子高齢化の時代を生き抜くことはむずかしい。……現代の通信革命と経済優先の社会は、家族のきずなを解体するように働いていゝ。近親者や隣人との関係

よりも、自分の生き方を充実させることが優先されるからだ」（『家族進化論』）

山極さんは、人間が今後、「家族を維持していゝのはむずかしい」と見ていゝます。もし人間が、家族をつくり上げた原則（「繁殖における平等」と「共同の子育て」）を失い、「それが、音を立てて崩れ落ちたとき、私たちはもはや人間ではなくなつていゝだろうと思ふ」（同）と締めくくつていゝます。

将来の日本は、家族をもたない人が増えるであろうという山田さんの予測も、家族の存在そのものの危機を訴える山極さんの見方も、家族を重要なものと見ることにいゝささかの違いもありません。もちろん社会教育団体としてのわが会も同じです。わが会は、「明るく元気な家庭の確立を通じて、仕合わせな暮らしの実現を目指していゝ」のですから、「家族を守ること」は、わが会の使命です。

では、どのように守るのでしょうか。
愛和した仕合わせな家族をつくり上げることによつてです。

次代を担う子どもたちに家族の幸福、家族の喜びを十分に味わわせることです。将来、家族の形は、伝統的な形態から外れていゝかもしれません。でも、家族が生命を生み出し、生を育むところであることに変わりはないはずですから、家族を求める気持ちは変わりません。いかなる形の家族でも、そこは愛和に満ちた場所であればならないのです。

そこで今月は、春の大会で提唱した「つくり上げる家族」の実践。これを課題といたします。夫婦愛和を実現するところから始まる「家族になる喜び」。家庭を「愛和」のある場所にしようとして、それぞれに与えられた役割を果たす努力。そうした真摯な生き方と、ひたむきに頑張る姿を子どもたちに示していただきたいのです。あなたの大切な家族を守るために。